

死をめぐる想像力 六道輪廻のコスモロジー

健康開発学科 講師 浅川泰宏

(1) 死と他界観

「死」は人類の根源的なテーマである。生物である人間は、誰もいずれ死を迎える。だが、興味深いことに、われわれは他者が死にゆくさまを見ることはできても、その後のことについては答えられない。死を自らの経験の後に語ることはできないからだ。そこで人類は、死後の世界についての文化的な理解を発達させてきた。避けられない死に対する恐れと不安は、死をめぐる想像力をかきたてることになったのである。そこでは死後の世界は「この世」にいるわれわれが直接体験することの出来ない「あの世」として捉えられた。こうした観念を「他界観」と呼ぶ。

(2) 六道輪廻のコスモロジー

日本では中世に他界観が発達した。その典型例が『熊野歎心十界図』などの、いわゆる地獄・極楽図である。そこには天、人、修羅、畜生、餓鬼、地獄の六つの世界が描かれている。誕生とは、魂が人の世界への境界をくぐりぬけることで肉体を持つことである。人々の一生は四季にたとえられる。芽吹いた命は、活力に満ちた繁茂のときを迎えるが、いずれ落葉のごとき老いとなり、雪のように冷たい死に至る。そして死後、肉体は消滅し、魂のみの存在となる。死者の魂は再び境界を超え、閻魔王の前に立つ。その裁きの結果によって、魂は六つの世界のどこかに転生する。このように魂が六つの世界を流転すると考える世界理解を「六道輪廻」という。

六道輪廻は、われわれの生きる「この世」が、大きな宇宙の一部にすぎないことや、この世とあの世が境界によって分断されながらも、実は地続きであることなどを教えてくれる。このような世界や宇宙の成り立ちについて説明する文化の体系をコスモロジー（世界観）という。

(3) 死をめぐる想像力のダイナミズム

六道輪廻は日本文化の伝統的な他界観である。だが、それは孤立した日本文化が単独でつくりあげたものではない。むしろ、他の文化との活発な交流から生まれた歴史的な産物なのである。死者を裁く閻魔王は、インドのヴェーダ神話に登場するヤマ神を源流とする。また死者が転生するという輪廻の考え方は、インドから中国、朝鮮半島を經由し、東アジア的な解釈を施されたうえで日本に伝わった仏教文化による。天国と地獄のように、世界が善と悪の二つの世界からなる観念を善悪二元論と呼ぶが、そのルーツは古代イランのゾロアスター教にある。これが東西に伝播し、仏教、ユダヤ教、キリスト教、イスラームなどの他界観を発達させていった。

このように、文化は特定の国や民族に固有のものではけっしてない。むしろ、常に変容する可能性をもったダイナミックなものである。われわれの死のとらえ方も同様だ。「私のお墓の前で泣かないでください そこに私はいません」と歌う『千の風になって』（新井満訳詞）のヒット。そして、戦後日本に生まれた死の処理にたずさわる職業・納棺師に焦点をあてた映画『おくりびと』が海外で評価されたことは象徴的である。文化がますますグローバル化する現代において、われわれの死をめぐる想像力と感受性が、なお豊かなものであり続けていることを、改めて思い起こさせてくれたのではないだろうか。

(参考文献) 大阪市立博物館編・社寺参詣曼陀羅・平凡社・1987